
世界の終わりの空の色

律花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の終わりの空の色

【Nコード】

N1791N

【作者名】

律花

【あらすじ】

いつからか始まったあたしの週課。

屋上で過ごすこのひと時だけ、あたしは世界の終わりを見る。

中学校に入学して、一年以上。いつの日からか、屋上で夕暮れ時を過ごすのが日課　いや、週課になっている。

昼休みにはほかの生徒たちが昼ご飯を持ち寄って、わいわいやっているけれど、こんな時間にわざわざ屋上で時間を過ごそうなんて物好きなやつはいない。これが恋愛シミュレーションゲームか何かなら、憂いを帯びた美少年とばったり遭遇したりするのだからうけれど、残念というべきかどうなのか、この現実世界でそんな都合のいいことは起こりやしない。だからあたしは、存分に一人きりの時間を堪能できるってわけだ。

とんとんと階段を上り、屋上に通じるドアのノブを回す。わずかな軋みを挙げてドアがひらき、隙間から弱い風が吹き抜けていく。肩下までの髪がふわりと揺れ、制服のスカートがはためいた。

屋上には今日もひと一人いなかった。そのことにちよつとばかり安堵と喜びを覚えつつ、あたしは鞆を地面に放り出す。それから、正面にあるステレスのフェンスに腕を乗せ、身体を預けた。

フェンスに囲まれた味気ないコンクリートの空間は、ひとの溢れた騒がしい教室なんかとは一線を画している。人間関係のしがらみから解放された、あたしひとりだけの場所。グラウンドからサッカー部の連中の掛け声が聞こえてくるけれど、それも遠い世界のもののように思えてくる。

夏が近づいて、日中は身体が汗ばむようになってきたけれど、夕方はまだまだ風が涼しくて心地よい。

「ふう……気持ちいい」

そんなことを独りごちながら、ぼんやりと目の前に広がる光景を眺める。

眼下に広がるグラウンド。ランニングに精を出しているサッカー部員。学校の周りをぐるりと囲んでいる木々。密集した住宅地。黒々とした山の連なり。それから、燃えるような夕焼け空。

「今日は一段と、きれいだなあ」

空気の具合や雲の様子によって、いつも違った顔を見せてくれる空。

あたしは空が好きだった。なかでも、この夕焼け空は大好きだった。ずっと眺めていても、苦にならないほどに。

射るような西日が、半袖からむき出しになったあたしの腕を朱色に染める。

山々に被さるように細くたなびく雲や、その上をゆったりと流れるうろこ雲も、赤みがかったオレンジ色に染まっている。それがやがて、まるで幕が下りるみたいに、上の方から紺色に塗り替えられていく。

3

この瞬間を見ると、あたしはいつも胸がきゅっとなる。

一人きりになることを望んでここにきたはずなのに、なぜか自分だけが取り残されたような感覚に陥る。最近になって、その理由がわかった。

まるで、世界の終わりみたい。

暮れてゆく空を見るたび、そうあたしは思う。

見たこともないくせに、そんなふうに感じるなんて、変なの。

初めは自分のことながらそう思った。けれど、あたしがいま抱いている感覚を言葉にすると、どうしてもそれがしっくりくる。

世界の、終わり。

やっとこの言葉を探り当てたとき、ああ、これだって思った。あたしがそう感じたのだから、きっとそれが正解で、理屈を連ねて否定することに意味なんてない。

世界の終わりの空は、この夕焼け空みたいな色なんだ。

太陽がゆつくりと、山の向こうに消えようとしている。
紺色のベールが、町を覆ってゆく。

最後のひとかけらの光が、あたしの頬を刺す。

あたしはそつと目を閉じる。

空を燃やす真っ赤な炎。それが鎮まった頃には、世界にはもう誰もいない。

闇に包まれて、しんと静まり返った空っぽの町。

あたしひとりを残して、みんなどこに行ったのだろうか。

目を開けると、太陽は完全に沈んでいた。わずかな光の残滓だけが、山の稜線を縁取っている。

それが消えうせるのを見届けてから、あたしは踵を返し、鞆を拾い上げてドアのノブに手をかけた。

最後にもう一度、後ろを振り返る。

半分に欠けた白い月が浮かぶ空。それから、さつきよりもっと濃い静寂。

また、胸がきゅっとなる。

ほんとうに一人きりになったみたい。そんなこと、あるわけがないのに。

家に帰ったら口うるさい両親がいて、生意気な弟がいて、明日学校に行ったら馬鹿な男子たちや、つまらない話で盛り上がっている女子たちがいる。

世界の終わりを見たあとは、不思議だ。いつもはわずらわしい連中が、ほんのすこしだけ恋しくなる。

屋上の外へ、足を踏み出す。次おとずれるときに思いを馳せながら。
ゆっくり閉めたドアが、小さな軋みを上げた。

(後書き)

夕焼け空(特に夏の)って世界の終わりを彷彿させるなあと、けっこう素で考えてしまったりします。た、たぶん、そんなことを考えているのはわたしだけでしょうけど……どこから来たイメージなのか、自分でもよく分かりません。

それでは、なんだか可愛げのない中学生のお話でしたが、お読みくださった方に感謝です。つたないお話にお付き合いくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1791n/>

世界の終わりの空の色

2010年10月10日21時55分発行